

Ⅱ マガキ浮遊幼生出現状況調査

増養殖環境課 山下 樹徹・清水 重樹

1 背景・目的

昨年度に引き続き、マガキ *Crassostrea gigas* の天然採苗に関する基礎的知見を集積するために、浦ノ内湾における浮遊幼生の出現状況を調査した。

2 方法

図1の St.1 及び St.2 で実施した「アサリ浮遊幼生出現状況調査」で得た試料に含まれるマガキ浮遊幼生を、国立研究開発法人水産研究・教育機構瀬戸内海区水産研究所から提供を受けたモノクローナル抗体を用い、前報（山下・高橋 2019）に従って直接蛍光抗体法で計数した。

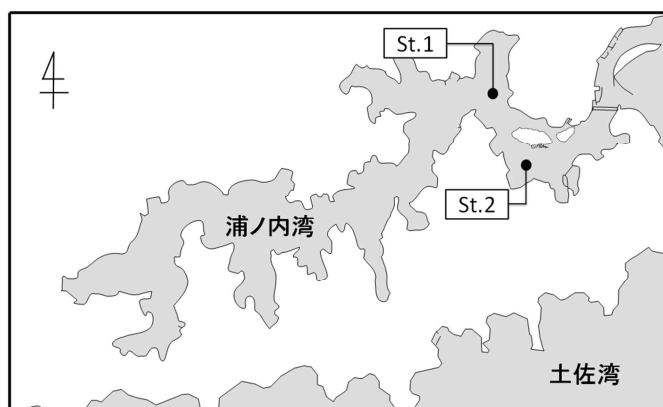


図1. サンプルング海域

3 結果

St.1 及び St.2 の調査における浮遊幼生の密度を平成 29 年の結果とともに図 2 に示した。

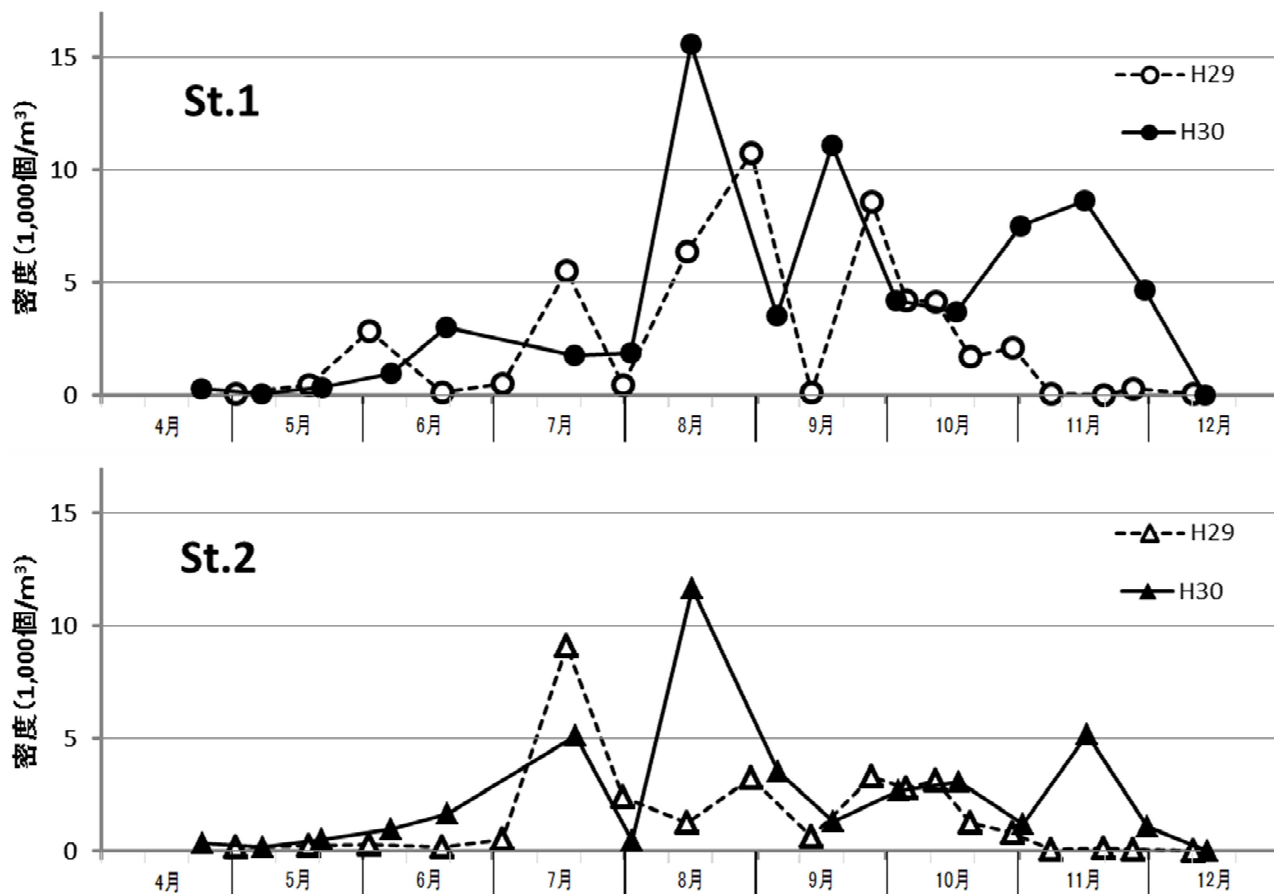


図2. 平成 29 年及び 30 年のマガキ浮遊幼生密度の推移

平成 30 年の St.1 及び 2 におけるマガキ浮遊幼生の最高出現密度は、それぞれ 15,600 及び 11,660 個/m³ であり、いずれも 8 月 16 日であった。その後、10 月には減少したものの、11 月に入って再び増加傾向を示した後、12 月の調査では St.1 及び 2 とともに 0 個/m³ となった。

4 考察

平成 30 年の浦ノ内湾におけるマガキ浮遊幼生の出現密度のピークは、平成 29 年と同様に夏期であった。一方、平成 30 年には 11 月にも増加傾向を示したが、このピークは平成 29 年にはみられなかった。平成 29 年の浦ノ内湾では、二枚貝にとって有害な赤潮プランクトンである *Heterocapsa circularisquama* が 11 月上旬から中旬にかけて発生したことが確認されており、これが浮遊幼生の発生に影響を及ぼした可能性がある。11 月のマガキ浮遊幼生の密度増加が浦ノ内湾における一般的な現象かどうかを検証するためには、継続した調査が必要である。

5 引用文献

山下樹徹・高橋紀行（2019）マガキ浮遊幼生出現状況調査．平成 29 年度 高知県水産試験場事業報告書，85-86.